

岩登りのプロテクションについての考察

黒田 誠（関西登高会）

よく勘違いされる事ではあるのだが、難度と危険度の相関は小さい。高難度のクライミングと初心者向きのルートでは、その登るために必要な技量は天と地ほどの差異があるだろうが、潜在する危険性にはほとんど差がない。ということは、登るための技量より、身を守るための技量を優先して、習得せねばならないのだ。

しかし、私のような若輩者が言うべき事ではないかもしれないが、現在日本の山岳地域で活動しているクライマーの危険に備える技術は過去に較べ地に落ちた物となっている。20年以上前なら、間違っただけではなかったかもしれないが、世界が前に進んでいる分、相対的に後に下がっているのだ。不思議の国のアリスにでてくる赤の女王の廊下ではないが立ち止まっているだけですぐに過去の物とされるのだ。その様な信じがたい技術が一般的なものとなっており、あえて危険性を高める事で自らを窮地に追い込む事を楽しんでいるのでは？という疑念すら見る者に抱かせている。また、プロテクション技術は日本において、全く不遇な技術である。過去においては、日本の岩が脆いという言い訳を乱用し、無数のボルトを使った時代、そして現在は勘違いしたフリークライミングの開拓手法に迫害されている。また、フリークライミングは安全だという信仰に迫害されている。信仰は大切だが、盲信は危険である。このような現状を踏まえた上で、私のつたない経験から得た知見を述べたいと思う。

WHAT?

何をプロテクトするのだろうか？もちろん、私たち自身の命であるし、友人であるパートナーの命である。スリング一本、カラビナー一枚にもそれがかかっている事を深く考えるべきである。ゆえに私は、古い装備や強度が分からない代替品を使うような事には納得できない。また、その様な仲間の命を軽視する行為はパートナーに対する最大の非礼の一つであると言う事を覚えておくべきである。そういう訳で、明らかに年代物の装備を携えている指導者を信用しすぎるのは問題である。自分の命を護る技術を得るのだから、自分でしっかり見極めていく必要があるし、その内容を自分で吟味する義務がある。

WHY?

何故プロテクトする必要があるのだろうか？もちろん、危険だからだ。ただ、残念な事に危険って奴は、見える人にしか姿を現してくれないときがある。常に、今、自分がどのような危険に晒されているのかと言う事を認識しようという努力を続ける事によってのみ、危険を感知する能力をあげる事が出来るのではないだろうか。全ての登山、そして人工壁を含めたクライミングは、危険な行為であるということを忘れてはいけない。危険の度合いの差の問題だけで、行為自体に潜在する危険から逃れる事は出来ない。そして山岳地域での危険は複雑で多岐にわたっている。それは山を変えらる事ではなく、クライマー側が賢くなることでのみ、かわしていけるのではないだろうか？山

1. 登山技術に関する調査研究

を人為的に遊園地にしてしまえば、登山は我々にもう何も与えてくれはしない。

WHO?

誰がプロテクトするのだろうか？基本的にはリーダーだ。ここで言うリーダーは、クライミングのリードをする者の事を指す。(私の考えでは、ロープの先頭にたっているものがパーティのその時のリーダーである。) まず、落ちてはいけなくところは絶対に、落ちないのが基本である。(もちろん、どんな所でも落ちてはいけなくのだが…) まず、その落ちてはいけなく場所を見抜けないと、山岳地域でクライミングをする事は出来ない。クラッグクライミングのエリアで、一本目のボルトで平気にハングドックしているような方を良く見かけるが、その様な方はもう少し考えることが必要である。行動的プロテクションをもっと考えなければいけなく。もちろん、クライミング能力をあげる必要もある。落ちない事以上のプロテクションは存在しない。5.13を登る者なら、間違ってもVIでは落ちない。アルパインクライマーは、5.11で十分だったのはもう15年前の話だ。これで十分だというラインは存在しない。出来るかどうかの問題ではなく、姿勢・態度の問題ではあるが、常に自分を上げていこうという意思が重要である。日本国内の殆どの壁がオールフリーで登られている現実を、学生諸君は直視し、自分たちの進むべき方向を判断すべきである。若い今こそが、チャンスだったのだと言う事は、それを失いかけてから実感される物であるようだが……。

(今の私のこと……)

夏の岩登りだけでなく冬季登攀で使う道具も、使う者がフリークライミングにある程度の能力を持っていることを前提にデザインされており、冬季登攀の基礎としてクラッグクライミングは非常

に重要になってきている。

そして、よくグランドフォールの責任をビレイヤーに負わせている者がいるが、その多くは間違いである。落ちても大丈夫なプロテクションのシステムをそのピッチに築くのはリーダーの責任範囲である。そしてビレイヤーを選んだのはほかならぬリーダーである。それも責任範囲である。登れない者や安全を確保できない者には、まだ無理だ、鍛えなおして来いと言える能力も、リーダーの責任範囲だし、それ抜きには、良いチームは築けない。

では、ビレイヤーは何もしなくてもいいのだろうか？堅牢であるとは言い難い日本の岩場では、確実なビレイ技術が重要である。きっちり止める事は出来る上で、コントロールしてロープを流す事が出来るようにならなくてはいけなく。流してグランドフォールさせるのであれば意味はない。かといってグランドフォールしない箇所であれば、衝撃を減らす努力をしなければいけなく。確保は非常に高度な状況把握能力と技術が必要である。はっきり言って、タイヤなど落としてもその技術は身に付かない。友人であるクライマーが限界にトライするクラッグクライミングでこそ身に付くと思う。クラッグですぐに諦めて、テンションをかけているグループがビレイを満足に出来ないのはよくあることである。クラッグでは、しっかり落ちる事によって、最終的な安全を確保する技術が身に付くし、クライマーは落ち方を身に着ける。安直に落ちるようになると、スポーツクライミングの弊害を唱える方が居られるが、それは誤りである。真剣に取り組んでいる者なら、その様な発想は絶対にしない。一度、真剣に人工壁に取り組んで見られる事をお奨めする。

同時に、ビレイは何を確保しているのかをはっ

きり認識すべきである。それは、友人の命である事を。

WHEN?

何時、プロテクションを設置するのだろうか？当然、危険な場所や落ちると思われる箇所の手前である。落石や落氷の危険がある箇所では、できるだけ素早く行動すべきで、最低限のプロテクションの方がかえって安全であるだろう。そこに滞在する危険と、そこをスピーディに抜けれる能力を天秤にかけ、進退を判断すべきである。完全な安全は存在しないので、相対的な危険度を判断しないとイケない。自分の出来る事と出来ない事をしっかり認識しておく事は、身を護る最低限の事である。そのためにはクラッグで自分の限界に挑む姿勢を保つ事が重要である。

また、よく見かけるのが窮地に追い込まれてから、プロテクションを取ろうとしていいかげんな事をしている事である。しっかりラインを読んで、難しくなる前、プロテクションを取れなくなる前にしっかりしたプロテクションを取らないとイケない。

また、目標とするルート全体を捉えることの大切である。個々のピッチ、個々のムーブに一所懸命になる事と並行し、全体の進行を計算する能力は大切なことである。既成のルートであれば、既に登った部分の難度とこれから待ち構えている部分の難度・長さを比較し、これから必要な時間が予想できるはずであるから、進退を判断する材料にする事が出来る。

WHERE?

では、どこにプロテクションを採ればいいのか？まず、山が差し出してくれている可能性に目を向けなければいけない。しっかりした立木は無いだろうか？ピナクルは？上向きフレーク

は？チョックストーンは？次に、道具が使いやすい弱点に目を向けるべきである。もちろん、そのピッチのグレードで、安定した姿勢を作れる箇所だ。

HOW?

さて、本題である。ここで、一つ心に留め置いて欲しい事は、全ての正しい事を積み重ねる事が、結果として正しくない事となる事が登山において往々にしてあるということだ。一つの危険にだけ、目を向けていると、結果として他の危険からの窮地に陥る事を忘れてはいけない。手を抜けというのではない。山全体を見る必要があるということである。知識は重要であるが、それに拘ってれば、山には登れないことは保障つきである。その場、その場で最低限の装備、手段で解決できるのが本当の技術である。簡潔でいて、それで十分。それが最上である。

はっきり言って、この手の話を始めると、小難しい手法の話に流れがちである。私自身、どちらかといえば、その手の話が得意である。だが、そちらははっきり言って、実践的ではなく、余技である事を自覚し、今回の原稿では、自制し控えめにしておく。

1. ナチュラルプロテクション

日本語では、チョックやSLCD'Sまで含むようだが、よく考えると、それらはぜんぜん自然じゃない。当然、登山の本場であるフランスやニュージーランド、カナダなんかでは、その様な分類はしない。ナチュラルプロテクションは、山が差し出してくれている可能性を利用する方法の事である。

A. 立木

日本国内の登攀で、最も有効な物は、立木の利用である事は間違いない。全てのナチュラ

1. 登山技術に関する調査研究

ルプロテクションは、その事物の強度に依存しているため、その強固性をしっかり確認する必要がある。すなわち、樹勢、根の張り方、洞の有無、幹の径などである。

後は、ずれない様に巻きつける事だけである。径の細い立木の場合は、もちろんクレイムハイストで、しっかり根元に巻き付けないと、荷重がかかった時に、木がしなりスリングが抜け落ちるので注意が必要である。基本は、出来るだけ根元にクレイムハイストで絞めると覚えておけば間違いが無い。

また、正確には、巻き付ける方向やスリングの屈曲や縫い目の位置の議論もあるのだろうが、そんな事は、強度表示された新しいソウンスリングを使用している限り、気にしなくてもいい。例え、良くないとされる用法によって強度が落ちたとしても、十分な強度を発揮する信用できる物を用意する事が大切である。もちろん、興味を持って研究する事は大切な事ではあるが…。

B. ピナクル, 上向きのフレーク, テラスの大岩

しっかり安定性を確認すれば、簡単に確実な支点になる。良くピナクルにボルトが打ってあるが、打った人はよほどセンスが無いのであろう。ピナクルにスリングをかけたのと、ピナクルにボルトを打ったのでは、どちらに強度があるのかは自明である。

もちろん、上から被せただけでは、ロープの流れによって、簡単に取れてしまうので、オポジションを採ったり、要らないギヤを重りにして、外れないようにする工夫を忘れてはいけな。また、短すぎるスリングを使うと、流動分散のときと同じ原理でスリングに荷重が過大にかかるので注意が必要である。

オポジションとは、一つの向きにしか強くな

い支点を、その逆向きに効く支点とタイトに結びつける事で、動かなくし、他の方向への耐性を高める事である。良くある時間のロスは、同じ種類のプロテクションを使用したくなるという点（例えばチョックを使うときに、相方もチョックにしようとする）にあるように見受けられる。向きが逆になる物であれば、何でもいいのだ。

C. チョックストーン

クラックに挟まった石は、とてもよいプロテクションになる。使い方は、しっかりスリングで巻くだけだが、荷重がかかった時に石が動いてスリングがすっぽ抜けないように良く観察する必要がある。すっぽ抜けるだけならまだ良いが、石を友に落下するのは悲惨だ。

D. トンネル, 砂時計

よく石灰岩や長石の多い花崗岩で見かける構造で、小さい石柱の後ろが空間になっていて、スリングが回せる事が良くある。これもスリングでしっかり絞めこむだけであるが、エッジが無いのか、ヒビが入っていないかをしっかり確認して使う必要がある。

2. 非自然物

自然物を利用できないとき、初めて道具が登場する。これらの物は、登山者が自ら準備し、運び込み、そして登山のルールに従い、もって帰らなければいけないものだ。全ての登山者は、全てのルートにトライする権利を有していると共に、全ての後続者に同じ条件での登攀を保障する義務を有しているのだ。身勝手な考えで残置物を増やす事は、ルール違反である。もちろん、全てにおいて、生命の確保が優先されるのは言うまでも無い事だが……。

また、道具を使う上で大切なのは、その道具の

原理や限界を理解する事である。そうすれば、おのずと使い方の工夫を自ら考案する事が出来るようになる。

A. チョック

最も使用頻度の高い道具であるし、最も信用性の高いものである。軽量で、故障する事が無い、見た目で効きが判断できる、安価である、回収が楽であるなどの優れた点を有している。欠点は、単体では一つの方向にしか効かない、クラックの形状に効きが左右される、フレアーしていると使えないなどである。

プロテクションとしての使い方は、単純明快。形状から見て、誰でも想像できるはずである。岩の割れ目(=クラック)に挟み込むのだ。要は、そのポイントを見つける目と、クラックの大きさとチョックの番手の大きさの関係を覚えこむ作業になってくる。また、チョックの良く効く場所は、フィンガージャムの良く効く場所と同じなのは、その原理が同じなので、当然である。と言う事は、フィンガークラックを登り込む事、それ自体が、チョックの習熟への早道なのである。この事は、もう一つ、大切な事を暗示している。自分がぶら下がっている指より上に、チョックを決めてはいけないのだ。なぜなら、次に使うホールドが無くなってしまふからである。脇ぐらいの位置でチョックを決めてやるのが、基本となる。これは全ての道具に共通する事項である。

チョックは一つの方向にしか効かない為、ロープの流れで上向きに引かれた時や、ロープの屈曲点にセットされた場合、その箇所より上部の支点到にテンションが入り、ロープが張った時に、簡単に外れてしまう事が多々ある。これを防ぐには、柔らかいスリングで延長してやった

り、登り始めと屈曲点の支点ではオポジションをとる必要がある。特に、登りはじめの物が外れると下から順に外れてしまう事(ジップアウト)があるので、要注意である。

登り始めでオポジションが取れない場合には、必ずビレイヤーが立ち位置を良く考え、ロープが屈曲しないようしないといけない。クラックのエリアでもよほど足場が悪いときを除き、壁からはなれる事は避けるべきである。全く信じられない事だが、近頃は、壁から離れないと、クライマーが見えないからといって、離れる事を指導している一部の組織があるようだ。壁から離れるように指導されている方との、御付き合いは遠慮しておくのが賢明というものである。

水平クラックの場合には、左右ではオポジションをとる事で、ある程度は対応できる。もちろん、縦のクラックほどの支持力は期待できないし、片手でのセットには習熟が必要なので、左右両手ともに練習しておく事が必要である。

チョック類の応用的な使い方としては、浅いクラックにはハンマーインしてしまう事がある。ボトミングの効果に、ハンマーで叩く事でアルミヘッドの効果プラスし、かなり強固な支点になる。もちろん再利用は難しいが、懸垂下降の支点としては、非常にポピュラーな方法である。もちろん、バウンズテストを行うべきではある。

B. ヘキサセントリック

いくつかのメーカーから販売されている大型の変六角形のチョック類である。ある程度の変化に対応できる。ボトミングだけではなく、カミングの効果も利用できる形状になっている。軽量で、故障が無く、安価であるなどの利点がある。難点としては、下開きのクラックには使

1. 登山技術に関する調査研究

えない、少々の習熟が必要である点ぐらいである。大型の物に特にメリットがあり、小型の物であればスエッジ型のチョックの方が使いやすいかも知れない。日本でも、もっと使われている道具である。

後述のSLCD'Sとは違い、上開きのクラックに相性がいい反面、下開きのクラックには効かない。基本的な使用法はチョックと同じであるが、大きい分はずれ易いので、ランナーの採り方なので工夫してやる必要がある。

ヘキセンの類もハンマーインしてやるのが良くある。ぎりぎりのサイズのクラックに叩き込んでやると回収は不能になってくるが、確実な支点になる。懸垂下降点に良く使われる方法である。また、氷が張ったクラックには、ハンマーインは非常に有効である。

C. トライカム

トライカムは非常に有効な道具である。何故、日本でもっと普及しないのか、全く持って謎である。軽量で、故障も無く、ボトミングでもカミングでも効かせる事が出来、様々な形状のクラックに対応できる利点を持っている。欠点としては、大型のものはロープの流れで外れてしまい、突然ランナウトしてしまう事や、セットに幾らかの習熟が必要な点である。

トライカムは効きが強すぎるために、回収にはハンマーが必携である。ナツキーを上手く使い、カム効果が解除される方向に誘導してやら無いといけ無い。

トライカムやヘキセントリックは、習熟していないとフリークライミングのリードには使いにくいものであるが、ビレイ点のような安定したところでは、問題なく使える。それゆえ、次のリードクライマーの為にSLCD'Sを温存し、

これらの道具でビレイ点を作っていくというのが実践的である。人工登攀のルートでは、特に有効な道具であるのも、この事と同じ理由からである。

トライカムも、一つの方向にしか効かないので、オポジションなどの対応を必要に応じて行う必要がある。これも、ハンマーで強引にセットしてやると、回収は出来ないが堅固な支点になり、懸垂下降に便利である。もちろん、回収不能な残置は推奨されるものではないのだが…。

D. SLCD'S

(Spring-loaded camming devices)

フレンズに代表されるバネ仕掛けの機械式チョックの事。設置が容易で、パラレル・下開きのクラック・フレアしたクラックに対応できる点が優れている。だが、重量があり、故障する可能性があり、単価が高いなどのデメリットがある。また、上開きのクラックでは、ロープに振られて勝手に歩き、外れてしまう事も、良くあることなので、長めのスリングで歩き難いようにしたり、オポジションで移動しないようにしてやる工夫を忘れてはいけない。

良くする誤りとしては、タイトすぎるセットである。一杯まで引いてセットすると、回収が出来ないし、フリクションの悪い岩だと滑り出る事で判る様に、カム効果が得られないので、効きが弱くなってしまうので、要注意である。また、カムの頭がクラックの奥に当たった状態でセットすると、回収することが出来なくなるので、要注意である。これは、カムを閉じさせるときに、必ずカムが前に入る事に由来する現象である。

また、SLCD'Sの場合は、始めの支点や屈曲点であっても、オポジションは要らないとする

解説がたまに成されているが、基本的にはするべきものである。出来ないときや、他の理由から省略するときには、そのリスクを他の方法でカバーする必要がある。

水平クラックの場合は、ステムが柔軟性のあるワイヤーでない物の時には、注意が必要である。この場合は、クラックに接しているより内側で、タイオフしてやる工夫（ガンクス・ノット）が必要である。

SLCD'Sは荷重がかかると、クラックを広げようとする力が働く。そのため、浮いたフレークを落としてしまう事があるので、よく岩を見て使用しなくてはいけない。その逆に、しっかりしたクラックの内部が、少々脆くても、脆い部分を押し込んで効く事もある。また、砂岩などでは、ロングフォールをした後にカムの食い込んだ跡がつく事もあり、なかなか面白い物だ。

ワイヤーステムの物で、2本軸の物は、最近人気が無いが、特に小型の物では、トリガーを引く事無しに、クラックに押し込む事が出来るため、高難度のフリークライミングやセットする場所が限定されているようなエイドクライミングで伸び上がってセットする時にとても有利である。また、トリプルと呼ばれるカムが3枚のモデルは、ロープのゆれにも強いので、フリークライミングに適している。

最近の物は、ボトミングにも対応するようにデザインされてはいるが、カミングで効かしている時に比べ、支持力は落ちるものとなっている。サイズの選定をしっかりと、最終手段としてしか用いるべきではない。

E. ピトン類

ピトン類は、いまや、岩場においてチョック

の可能性の途切れている部分を繋ぐ物としての役割しかもたない。ということは、チョックをマスターした者でないと、その使う場所を見出せないということである。また、チョックをマスターしている者とそうでない者では、クラックに対する観察力が段違いなため、その習熟速度は全く違う。どちらを優先して学ぶかは自明である。

だが、しかし、登山の実際において、未だに大きな役割を持つのも事実である。通常のコライミングにおいては、クロモリ鋼のピトンが有効で、支持力も高い。しかし、一部の石灰岩などのピトンワークに向かない岩には、軟鋼の物が有効であるが、旧式のものには強度が無いので、しかるべき強度表示のあるもの（CEマークなど）を選んで購入するべきであろう。

また、出来る限り回収の努力をするべきである。日本の小さな岩場を登るのであれば、残置していても登れるのであるが、世界の壁を目指すのであれば、全てを回収し上部に装備を運ばないと生きて帰ることは出来ない。小さな世界で満足し、それで良いという主張もあるだろうが、同じスポーツをする者として、さらに大きな向上心をもって真剣に取り組んでいる人の邪魔はすべきではない。

よく聞く話だが、ランナー用にピトンを打った事はあるが、懸垂の支点には怖いのでボルトを打つ人が、結構いるようだ。墜落時の衝撃と、懸垂下降時の荷重のどちらが大きいかわからない方々なのであろう。ネイリングは、経験に比例する技術であるので、コツコツ沢山打った者が上達するし、しっかりと効きの検証をしていく事も大切である。

ピトンを打つ上で大切なのは、重いハンマー

1. 登山技術に関する調査研究

を使う事である。経験のある者であれば、軽いハンマーやアイスアックスでも、打つ事は可能である。しかし、経験のない者、腕力の無い者ではピトンをクラックに入れる事は出来ても、軽いハンマーでピトンの歌を聴く事は至難である。いくら殆ど使わないといっても、使えない物ではただの重りである。携行する以上は使用に耐える物を準備するのが賢明といえよう。

また、アイスバイルを携行するときハンマーを省略される方が多いですが、アイスバイルでピトンを効かす事は結構難しい物だ。一度、試してみて、ハンマーを家に置いておくかを判断した方がいいだろう。もしくは、しっかり打てるようになるまで、練習するかだ。

F. ボルト類

今や、ボルトは魔法の道具ではなく、ピトンの可能性と次のプロテクションの可能性を繋ぐ物でしかない。と言う事は、ピトン類を使いこなす事が出来る物だけが、打つ事を許されているわけである。どういう訳か、日本では、ピトンワークの未熟さをカバーする物として利用されている節があるが、それはおかしい傾向であると言わざるをえない。

また、日本オリジナルのリングボルトやRCCボルトは、全く強度的に不足しているので、もはや、まともな登山者は使用しない物である。学生諸君も、以前からの惰性で使っているようだが、ここで、その流れは断ち切るべきである。最低でも8ミリ以上のスタッドアンカー（akaグージョン）を使うのが、現在のスタンダードでしょう。私達は、ヒマラヤ登山でも、10ミリのステンレス製のスタッドアンカーを用いていました。ボルトを打つ事を推奨するわけではないですが、打つなら信用できる物を使う

べきである。

また、よくアルミ製のハンガーを山岳地域で見かけるが、メーカーはアルミ製のハンガーを登攀用としては、販売していない事に留意しないとイケない。ガルバニック腐食などにより、強度が急速に劣化している事もあるので、その使用には慎重であるべきである。

現在、フックを始め優れたエイド・ギヤがそろっています。そのため、自然の摂理を無視した、ボルト梯子の設置は薦められる物ではありません。自然なラインを見出すのも、登攀者の能力のうちであると思えます。

また、初登者が使わなかったボルトの打ち足しは、ルール違反である。初登者と同等以上のスタイルで、初めて再登と認められる以上、その方法でのトライは、もはや、記録として再登と認められるものではない。

残置されているリングボルトのタイオフにリベット・ハンガーを推奨されている方もおられるようだが、リベット・ハンガーは強度表示の無い非常に弱い物である。これは、よろしくない方法である。8~10ミリのダイニーマ・スリングやワイヤード・チョックで行うべきだ。どうせ行うのであれば、少しでも確実な方法を選択するのが賢明である。

残置されているRCCボルトで顎がきっちり着いている物は要注意である。たまに穴が深すぎて、拡張が不十分な物が混じっているからだ。

また、一部の山岳団体によって、既存のクラッグやボルダリングプロブレムへのボルトの追加が近年問題となっている。これは全ての登山者にとって恥ずべき行為であり、全く弁護の余地の無い蛮行、奇行と言わざるをえない。担げなかった荷物を担げるようにするのと同じく、

登れない物を登れるように努力していくのが登山者の姿勢ではないのでしょうか？その様な者達の言い分には、ボルトを打たない事を上級者のエゴだと言う非難もママあるが、それは誤りである。その様な行いこそ、努力しない者達のエゴに過ぎない。初登者や更にいいスタイルでの実践をした先人を尊敬する事は大切である。

最後に

登山の正誤は結果によってのみ、評価される物である。どれほど、正しいとされる事を積み重ねたとしても、事故を起こすときはある。それは、結果としてどこかに間違いがあったのだ。安全性を追求した結果として、違うリスクを負うことが、学生諸君の登山の中にも多々あるように思える。過剰装備での行動力低下や、集団主義による判断力の低下などである。全ての物事には、表の面と裏の面がある。良い方だけ、悪い方だけを見るの

ではなく、しっかり、自分が行っている事を見つめる事が必要なのでは無いでしょうか？

また、クライミングの目標は、いい道具を揃えて、使い方をマスターしていく事ではなく、憧れの頂きに立つことである。その過程をいかに楽しくしていくかの方法論が、クライミングになってくると思う。山の一番綺麗な面から、自分たちの手と足で登るためには、何を身につければ出来るか？、何を身に付ければ楽しく過ごせるか？、何をしていれば悲しい思いをしないで済むか？を考えないといけない。

敗退しても、良い仲間となら、それも良い思い出である。でも、やはり、天辺で仲間と握手したいよね。それは、でも、あくまでもおまけであって、生きて帰る事こそが重要なのである。登山は失敗しても良い。それは勉強である。ただ、五体無事に帰ることに於いて失敗してはならない。